

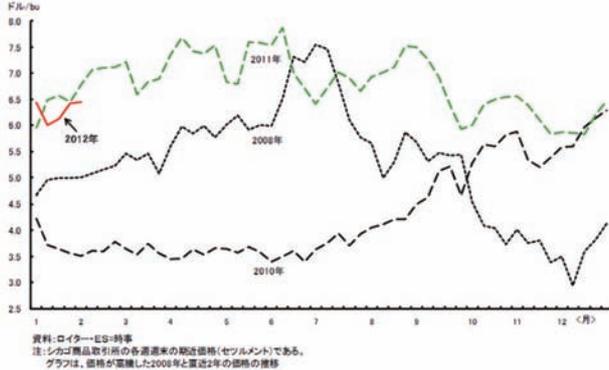
飼料原料の動向と今後の見通しについて

■現在までの価格推移

(とうもろこし)

2010年は、米国及び南米の豊作見通しから値を下げて推移していたが、7月以降は旧穀在庫の減少、ロシア及び近隣諸国の干ばつを材料に高騰。10月には新穀生産量が大幅に下方修正されたことから騰勢を強め、年末には6.2ドル/ブッシェルを超えた。

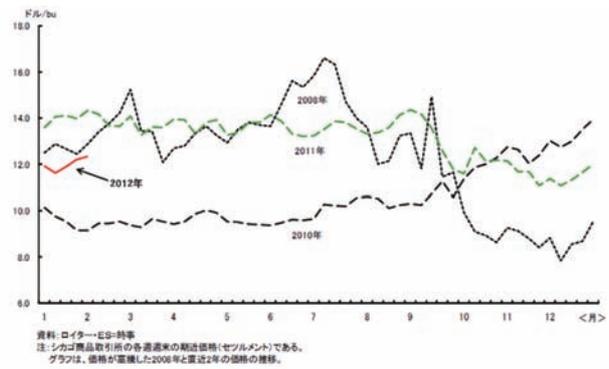
2011年は、旧穀の単収減による需給の逼迫に加え、作付け進捗の遅れから6月には一時7.9ドル/ブッシェルを超えた。その後、米国の高温乾燥懸念はあったものの、欧州の金融問題が表面化し、商品安の展開から穀物相場も比較的安定して推移した。



(大豆)

2010年は、米国及び南米の豊作見通しから軟調に推移していたが、7月以降は小麦の高騰から値を上げた。その後も旺盛な中国需要、新穀生産量の下方修正やアルゼンチンの高温乾燥懸念などにより年末には13.9ドル/ブッシェル台まで値を上げた。

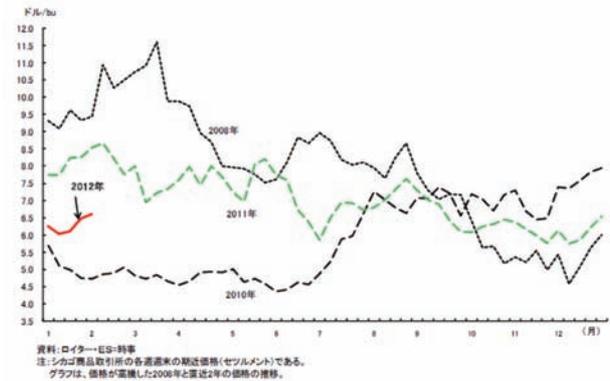
2011年は、前半は需給の逼迫感から高値で推移した。その後、中国の買付けの一服感や南米の豊作見通し、欧州の金融問題を始めた世界経済の不透明感に対する懸念から軟調に推移した。



(小麦)

2010年は、世界生産量が3年連続で需要量を上回るとの見通しから値を削る展開が続いていたが、7月以降はロシアの干ばつによる禁輸措置から反騰し、7.0ドル/ブッシェルを超え上昇した。

2011年は、ロシアの禁輸措置が解禁されたものとうもろこしの代替需要により需給は引き締まりつつあった。しかし、東豪州の記録的な豊作もあり相場は安定的に推移した。



■2012年度作付意向面積、四半期在庫統計

去る3月30日に米国農務省より2012年度作付意向面積及び3月1日時点の在庫統計が発表された。

米国のとうもろこしの作付意向面積は、95.9百万エーカーと前年を4.0百万エーカー上回り、実現すれば史上最高となる。一方大豆の作付意向面積は、前年を1.1百万エーカー下回る73.9百万エーカーに過ぎなかった。

とうもろこしの在庫統計は6,009百万ブッシェルと事前予想を下回り、3月付けとしては2003/04年以来の低水準となった。大豆は1,372百万ブッシェルと前年3月付けよりは増加している。

以上により、とうもろこし、大豆共に相場は上昇している。

＜作付意向面積＞

	2012	予想平均	予想レンジ	2011
コーン	95.9	94.7	93.7~95.7	91.9
大豆	73.9	75.5	74.5~76.7	75.0
小麦全体	55.9	57.6	56.6~58.3	54.4
冬小麦	41.7	42.0	41.5~42.6	40.6
春小麦	12.0	13.4	12.1~14.5	12.4
デュラム	2.2	2.3	1.5~2.5	1.4

単位：百万エーカー

＜3月1日時点の在庫量＞

	2012	予想平均	予想レンジ	2011年12月	2011年3月
コーン	6,009	6,151	5,925~6,300	9,642	6,523
大豆	1,372	1,361	1,228~1,467	2,366	1,249
小麦	1,201	1,255	1,181~1,410	1,656	1,425

単位：百万ブッシェル

■2011/12年の需給見通し（4月米国農務省）

(とうもろこし)

2011/12年のとうもろこし需給は、世界的には前年を超える生産量が見込まれているが、米国おける生産

量は微減。需要面においては、世界的には需要の増加が見込まれ、米国においては飼料用及び輸出需要減少の見通しであるが、期初在庫の減少からいずれも期末在庫は減少の見通しで、世界14.3%、米国で6.3%と依然として低水準となっている。

＜4月USDA発表 とうもろこし需給状況＞

	09/10	10/11		11/12		
		3月	4月	3月	4月	
作付面積	86.4	88.2	88.2	91.9	91.9	
収穫面積	79.5	81.4	81.4	84.0	84.0	
収穫率 (%)	92.0%	92.3%	92.3%	91.4%	91.4%	
単収	164.7	152.8	152.8	147.2	147.2	
供給	期初在庫	1,673	1,708	1,708	1,128	1,128
	生産	13,092	12,447	12,447	12,358	12,358
	輸入	8	28	28	20	20
	供給合計	14,774	14,182	14,182	13,506	13,506
需要	飼料・その他	5,125	4,793	4,793	4,600	4,600
	FSI	5,961	6,428	6,428	6,405	6,405
	(内/エタノール)	4,591	5,021	5,021	5,000	5,000
	総国内消費	11,086	11,220	11,220	11,005	11,005
	輸出	1,980	1,835	1,835	1,700	1,700
需要合計	13,066	13,055	13,055	12,705	12,705	
期末在庫	1,708	1,128	1,128	801	801	
在庫率	13.07%	8.64%	8.64%	6.30%	6.30%	

単位:百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

(大豆)

大豆需給は、世界・米国ともに生産量は減少する見通しで、特に干ばつの影響による南米の減産は著しく、世界の期末在庫率は16.6%と3.4%もの大幅減少の見通し。米国は輸出需要の減少から期末在庫率は8.2%とやや増加する見通しとなっている。

＜4月USDA発表 大豆需給状況＞

	09/10	10/11		11/12		
		3月	4月	3月	4月	
作付面積	77.5	77.4	77.4	75.0	75.0	
収穫面積	76.4	76.6	76.6	73.6	73.6	
収穫率 (%)	98.6%	99.0%	99.0%	98.1%	98.1%	
単収	44.0	43.5	43.5	41.5	41.5	
供給	期初在庫	138	151	151	215	215
	生産	3,359	3,329	3,329	3,056	3,056
	輸入	15	14	14	15	15
	供給合計	3,512	3,495	3,495	3,286	3,286
需要	压榨	1,752	1,648	1,648	1,615	1,630
	輸出	1,499	1,501	1,501	1,275	1,290
	種子	90	87	87	87	86
	その他	20	43	43	34	30
	需要合計	3,361	3,280	3,280	3,011	3,036
期末在庫	151	215	215	275	250	
在庫率	4.49%	6.55%	6.55%	9.13%	8.23%	

単位:百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

(小麦)

小麦需給は、米国での減産は見込まれているものの、世界的にはロシアや東欧諸国などの増産により、期末在庫率は世界で30.6%、米国でも36.2%と安定した水準となっている。

■2012年の飼料原料価格・需給の見通し

米国のとうもろこしは、天候や土壌水分が良好に推移していることから3月下旬より作付けが始まり、非常に早い進捗となっている。これにより、今後新穀の需給が緩む可能性はあり、新穀の上値は重い展開も予想される。

＜4月USDA発表 小麦需給状況＞

	09/10	10/11		11/12		
		3月	4月	3月	4月	
作付面積	59.2	53.6	53.6	54.4	54.4	
収穫面積	49.9	47.6	47.6	45.7	45.7	
収穫率 (%)	84.3%	88.8%	88.8%	84.0%	84.0%	
単収	44.5	46.3	46.3	43.7	43.7	
供給	期初在庫	657	976	976	862	862
	生産	2,218	2,207	2,207	1,999	1,999
	輸入	119	97	97	120	120
	供給合計	2,993	3,279	3,279	2,982	2,982
需要	食用	919	926	926	930	930
	種子用	69	71	71	82	79
	飼料用等	150	132	132	145	180
	国内需要	1,138	1,128	1,128	1,157	1,189
	輸出	879	1,289	1,289	1,000	1,000
需要合計	2,018	2,417	2,417	2,157	2,189	
期末在庫	976	862	862	825	793	
在庫率	48.36%	35.66%	35.66%	38.25%	36.23%	

単位:百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

一方大豆は、とうもろこしと違い作付けはまだ始まっておらず、先に発表された作付意向面積や南米の大幅な減産により更なる需給の逼迫が想定され、相場は高騰するものと予想される。

価格的に有利とされてきた輸入大豆粕も、インド産については日本、中国、東南アジアに加え中東からの大量買付けなどから高騰している。

そうこう類も昨年の東日本大震災の影響で需給バランスが崩れ、グルテンフィードなどは地域によっては需給が逼迫している状況が続いている。

■海上運賃

2012年も新造船の供給は続く見通しで、海上運賃については船舶の供給過多による下落を期待したいところであるが、イランの情勢不安などにより原油価格が高騰しており、概ね横ばいで推移すると予想される。

■外国為替

2011年は、リビア情勢やギリシアの債務問題などから円が買われ一時75円台まで円高が進んだ。政府・日銀の為替介入もあったが、年後半は76～77円台で推移した。

2012年に入り、1月の日本の貿易赤字が記録されたことや欧州金融危機問題に一定の区切りがついたこと、2月に発表された日銀の金融緩和策、好調な米国経済指標などにも後押しされて円が売られ、3月には一時84円台まで円安が進んだ。今後も円安トレンドの展開となることが予想される。

以上のように、2012年の相場展開も非常に厳しくなることが予想され、特に大豆の需給逼迫と価格高騰は避けられないものと考えられる。国産飼料への回帰も、原発事故に端を発する放射性セシウム問題などもあり容易ではない。

今は飼料原料の産地の多様化を追求していく時期であるととらえている。

(飼料原料課係長 氏家 太)